

開会の辞

評価委員 藤澤 令夫

ただいま司会者からも言及がありましたように、文部省（現文部科学省）から科学研究費を受けて、5年計画で「古典学の再構築」（Reconstitution of Classical Studies）というプロジェクトをこれまでやってまいりました。本年度はその最終年にあたり、いわばこれまでの締めくくりの意味を込めまして、ただいまから二日間にわたってシンポジウムがおこなわれることになりました。

このシンポジウムのために、イギリス、ギリシア、イスラエル、フランス、台湾、アメリカ、そして日本の各国から参集いただき、それぞれすぐれた研究の成果を発表していただくことに対しまして、心から敬意と感謝を申し上げます。

‘Classics’や‘Classical Studies’という英語は、その本来の意味はともかく普通の用法では、ギリシア・ローマの今日まで伝わっている、哲学、文学、歴史・地誌、宗教などの典籍とその研究を指すように使われております。私たちは、しかし、それに限定せず、本日のプログラムにも表われているように、ギリシア・ローマのほか、さらにインド、中国、ユダヤ、イスラーム、日本などのそれぞれの文化圏、それぞれの民族における世界観や人間観のマトリクスになっている典籍とその研究を、すべて包含してこの言葉を使いたいということで、そういう意味での Classics と Classical Studies を再構築するということでもあります。その「再構築」は、いま申しました、それぞれの文化圏、それぞれの民族の古典の厳密な研究を踏まえたうえで、まさに古典学それ自体としての統一、統合を志すという意図を持っております。

幸いわが国には、東西にわたるそれぞれの文化圏の古典研究のための人材と体制が比較的良好に整っておりまして、このプロジェクトにも直接参加しております研究者が140名にのぼります。あとで中谷代表から詳しい説明があると思いますが、そのような古典学の現在における意味は何であろうか、という観点から、こ

れまで7度にわたって、シンポジウムをおこなってまいりました。たとえば「現代世界における古典学」（Classical Studies in the Modern World）、「新しい古典学」（Renewing Classical Studies）「古典における新しい価値の発見」（New Values to be Discovered from Classics）などをテーマとしてきましたが、今回は「創造の源泉としての古典」（Classics as a Basis of Creativity）という全体のテーマとなっております。

もちろん私たちは、非常に内実の異なるそれぞれの民族の古典を一般的な古典学として統合することが、それほど簡単にできることではないということをも十分自覚しておりまして、これまでもそのことは、何度も私たちのディスカッションの対象になってきました。しかし、ただひとつ間違いなく言えると思いますのは、この計画に参加している研究者たちが、それぞれの古典の研究に対して強い熱情をもっていることでもあります。その熱情が共有されているかぎり、私たちのプロジェクトも、その「統合」という目標に向かって、一步一步近づいていくことができるのではないかと信じております。現に、この共同研究がスタートした時点と現在の時点とを比べますと、その点の意識が明確になってきたのではないかと、私自身実感しております。

それでは basis of creativity とか reconstitution とか申しますときに、それは基本的にどのような方向性をもった creativity であり reconstitution なのか、ということを考えてみます。今日の一般社会の状況では、「古典」という概念に対してもっとも対極にあるのは「ジャーナル」journal——新聞とか最近では電波も含めます——という概念だと思います。（ちなみに、Journal とは diurnus というラテン語を起源とする言葉で、「その日その日の」ということです。だからジャーナリストとは、日雇い人夫のことだ、といったのは、私ではなく、ショーペンハウワーです。）そういうジャーナルには、北朝鮮による「拉致事件」とか、強盗殺

人からスポーツまで現代の雑多な「その日その日の」出来事が毎日報じられていますが、しかし現代そのものを見据えて、現代の最も本質的な特徴は何か、ということを考えてみますと、それは、科学技術というものの非常に急速な進展と独走のもとで、その科学技術が内にもっている効率性、利便性——それが経済性へとつながっていきいますが——、そうした効率性、利便性、経済性をひたすらに追求する価値観が大勢を支配しているということであり、別の言葉で言い換えますと、科学が技術に従属し、技術が経済・産業に従属するというパターンが巨大な趨勢となって、止めどもなく動いているというのが現状ではないか。

そのような傾向を端的にあるいは象徴的に表しているのは、ノーベル賞の自然科学の三分野——物理学、科学、生理学・医学——に見られる変化でしょう。今世紀のはじめにノーベル賞が創設されたときには、純粋な基礎理論というものが賞の対象となっておりました。しかしここ何年かは、産業技術に直結するような研究が、これらの分野のノーベル賞の対象に選ばれております。典型的なのは、ちょうど2000年に受賞した、集積回路の発明者ジャック・キルビー (Jack S. Kilby) の場合です。受賞の対象となった業績について彼は特許を出願し、日本からの分だけを計算しても約300億円の使用料を獲得して、自分の所属している会社につき込んでいる、という状況があります。日本人でも、ここ二、三年にノーベル賞の受賞者となりました白川教授とか野依教授の場合も同じように、いずれも産業技術と直結しておりまして、白川教授の場合は43件、野依教授の場合は270件の特許を出願していらっしゃるということです。このように経済・産業と結びつくようになったということが大きな特徴ですが、このことは、先ほど申しましたような趨勢を象徴的に表しているのではないかと思います。

あるいは、生理学の最先端の成果を医学、医療に応用した、不妊治療の場合ですが、卵子や精子がごく普通に売買の対象になっているということで、アメリカの大学のキャンパスでは、「卵子を求める」というような張り紙が出ているというような報道を読んだことがあります。運動能力が優れ知能指数が高く、できるだけ美人の方の卵子がほしいというような、勝手な注文がついているということですが、だいたい1万ドルから2万ドルが相場ということでした。逆に夫のせい

で子供ができないため精子の提供者を求めるという場合、このほうのお値段は約50ドルということです。

そういった、あれやこれやの現象に見られる強力な趨勢の根っこにある原動力は何だろうか。それは生存・生き延び survival のためにできるだけ有利な条件、有利な方策を獲得しようとする本能——私はつねづねこれをちょっと堅い言葉で、「人間がもっている生物的生存の直接的有効化の本能」と申しておりますが——です。そういうものが根っこにあって、そのようなモチーフで動いている。ですから当然のことながら、効率性、利便性、経済性においては人間に多大な恩恵を与えてまいりました。

しかし、科学技術に本質的に内包されるこのような生物的生存の本能に根ざす駆動因を、それ自体として原理的に見ますと、これはかつてプラトンが伝えていまして「ただ生きることではなくて、よく生きることこそを何よりも大切にせよ」という言葉において、ソクラテスが「ただ生きること」(ゼーン)と「よく生きること」(エウ・ゼーン)とを厳しく区別したうちの、「ただ生きること」のほうにひたすら属する動きではないかと思えます。つまり、ソクラテスが「よく生きる」ということで意味した「魂を大切にすること」、「自らの魂をできるだけすぐれたものにする」というモチーフを、それ自体として原理的には、はじめから排除しているということが、その動きの素性であります。では、その主要な関心は何に向かっているかということ、魂には向かわない、お金、権力、名誉のほうに向かう。ということで、先ほど触れましたような、科学が技術に従属し、技術が産業に従属するという構造が裏打ちされていると考えます。

われわれのプロジェクトが指向している creativity とか reconstitution というものは、そういう「魂の全面忘却」と金銭や効率のみにひたすら追従しているようなこの滔々たる趨勢、この強力な動向を、たとえ少しでも阻止するための砦を形づくるということでありたいと考えています。われわれの社会と文明が、ほんとうの意味での人間性 humanitas を堅持していくために。

そのようなことを念頭におきまして、今日と明日の講演とディスカッションに期待いたしまして、私の開会の辞とさせていただきます。

ありがとうございました。